

[別紙2]

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 森山 至貴

本論文は、現代日本におけるゲイ男性が、いまだ十分な社会的承認をえられない環境のなかで、どのような技法を用いて生き、その個人性と集合性を保持しようとしているかを、親密な関係性をめぐる高度に理論的な考察と、当事者たちの言説的実践の経験的な分析の両面から明らかにしたものである。そしてそれによって、ゲイ男性のみならず、現代社会におけるマイノリティ集団のあり方や、異性愛もふくめた親密性が抱える問題群を広く照らし出す論考となっている。

近年、社会的弱者やマイノリティの共同性が、当の成員に対して発動させる「圧力」が前景化されるようになってきている。この現実には、マイノリティの抱える問題はマジョリティからの差別やマジョリティとマイノリティの不平等な関係に還元できる、とする差別論の構図では描けない。「差別」や「抑圧」に対する「解放」という文脈では、マイノリティ集団自体が成員に対してはらみうる「圧力」を記述できないからである。

現代日本におけるゲイ男性が感じる「圧力」にもそれはあてはまる。本論文はこの「圧力」を、個々のゲイ男性がゲイ男性の集合性に対して抱く「ついていけなさ」としてとらえ、それがどのような社会的条件のもとに発生し、ゲイ男性の間でいかに回避されようとしているかを研究したものである。著者は、ゲイ男性同士が取り結ぶ関係性を「つながり」という言葉で表し、そのあり方が現代社会において抱える固有の困難を明らかにする。それをふまえて、ゲイ男性における「ついていけなさ」の構造とその回避策の方向性を描き出すことで、どのような乗り越えが可能であるかを探っていく。

本論文は序章、1章から3章の第一部、4章から5章の第二部、6章から7章の第三部、結論部分の終章、及び補論からなっている。

序章では論文全体の課題が設定される。まず、現代日本のゲイ男性が抱える固有な問題を「ついていけなさ」という言葉で拾い上げ、それが当事者性や差別論などの既存の議論では、いかにすくい取れないものであるかを述べる。さらに「個人と社会の対立」という社会学の伝統的な議論の中で、これがどう位置づけられるのかをふまえて、つながりのあり方の構造に注目してその条件を解明し、解決を求めていくという道筋が示される。

第一部ではゲイ男性に特有のつながりの特徴を描き、彼らの感じる「圧力」の前提として、現代のゲイ男性がおかれている歴史的・社会的な文脈を指摘する。まず1章では、1920

年代ごろから現在までの男性同性愛者のつながりの様態を大まかに追うことで、ゲイ男性のつながりが、特定の、同性との性的接触を求めるアイデンティティの所有者とのつながり＝「特権的な他者とのつながり」と、このアイデンティティを持つ者全体の（可能的な）つながり＝「総体的なつながり」の二種類に分化していったことが示される。現在のゲイ男性は、「特権的な他者との／総体的な」という、明確に分かれた二種類のつながりの元で、生きざるを得ない状況におかれている。

2章では他のマイノリティ集団にはない、ゲイ男性に特徴的な、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりとの関係が、ニクラス・ルーマンの親密性の分析を参照しながら、理論的に考察される。異性愛の場合、特権的な他者とのつながりは婚姻制度などによって囲い込まれ、社会全体のなかの局所的「例外事態」として位置づけられている（＝「圏」のゼマンティック）。それに対して、現在のゲイ男性の場合、総体的なつながりと特権的な他者とのつながりが並列的に位置づけられ、両者の間に安定的なゼマンティックを構築できていない。そのため、一方のつながりを求めるゲイ男性にとって、他方のつながりが発生させる文化や様式が過剰さとして経験される。この二種類のつながりの間の関係性の難しさこそが、「ついていけなさ」を発生させる要因となっている。著者はそれを「圏のゼマンティック」とその機能的等価として定式化し、ゲイ男性のつながりが抱える困難とその調停の可能性を探るという論文全体の方向性を示す。

3章では、1990年代中盤以降の日本における「ゲイコミュニティ」という言葉に着目する。この語の持つ理想主義的含意は、ともするとゲイ男性がそのつながりに対して感じる「ついていけなさ」を忘却させる可能性があり、それを通じて特権的な他者とのつながりを排除する可能性が大きいことが明らかにされる。そのため、現在の「ゲイコミュニティ」はゲイ男性のつながりを十分に表現する言葉になりえず、むしろ二種類のつながりの分化と一方の重視を自明視する効果をもつ。それが現代日本のゲイ男性における「圧力」や「息苦しさ」を発生させる構造的条件になっていると述べられている。

第二部では、近年の文献資料にもとづいて、二種類のつながりの間で生じる問題の現代的な姿を示し、ゲイ男性のつながりをめぐる現在の隘路を具体的に描き出す。4章ではゲイ男性のアイデンティティ、5章ではゲイ男性のライフスタイルを焦点にして、議論が展開される。

4章では1990年代以降にカミングアウトについて書かれた文章をとりあげる。その用いられ方から、個々のゲイ男性は、総体的なつながりへのアクセスのみが争点化された状況におかれ、総体的なつながりを通じて特権的な他者とのつながりへとアクセスすることが想定されていないという事態が指摘される。このような、二種類のつながりの関係の不全によって、カミングアウトという「解放」の実践が「ついていけなさ」を言論の構図上発生させつづけることが明らかにされる。

5章では「ゲイライフ」といううたい文句を掲げるゲイ雑誌『Badi』を分析の素材とし、ゲイ男性が共有するとされるライフスタイル像について検討する。この雑誌の語りでは、

「ついていけなさ」が「若いゲイはしばしば違うスタイルを持つ」といった形で片付けられがちであり、二種類のつながりをめぐる困難を世代論に回収することによって弱毒化する傾向をもつことが指摘される。ここでは、つながりの関係の不全がゲイ男性の共有する課題ではなく、その世代的な断絶として主題化されることで、それを解く試みまでもがあらかじめ封じられており、つながりをめぐる困難を現代において解くことが如何に難しいかを、あらためて示すものになっている。

第三部では、第二部で論じたような隘路を回避するために呼び出される相互行為上の技法が論じられる。ゲイ男性のつながりにおける総体的なつながりと特権的な他者とのつながりの分離に対応して、6章では前者についての技法を、7章では後者についての技法を論じている。

6章では、「こっち」という呼称についてのゲイ・バイセクシュアル男性へのインタビューの結果を分析し、このゲイ男性の集団を指す婉曲的な呼称が、「こっち」が何かに言及することなく、ある種の「仲間意識」をゆるやかに立ち上げることが見出されている。この呼称の用法は、総体的なつながりを積極的に押し出す困難と危険を織り込みながら、集団性を最低限維持しようとする、複雑な実践を可能にするものになっている。

7章では、ゲイ男性の間での言語実践としての「タチ/ネコ」という用語系が論じられる。この用語は特権的な他者とのつながりの中で、ゲイ男性が自らの欲求と相手の欲求を折り合わせながら、自らにとっての特権的な他者を選別し関係を築く手段であると同時に、その排他性がある程度解除され、さらにはそれでも生まれる共有規範を、所詮異性愛男女の様式であるから従う必要がない、というレトリックで解除することができるようにもなっている。その点で、二種類のつながりの分離による問題を幾重にも緩和する実践であることが明らかにされる。

終章では論文全体の議論を要約するとともに、そのインプリケーションが述べられる。現代のゲイ男性は、そのつながりのあり方による「ついていけなさ」という問題を生きている。本論文は、その困難の要因を同定し、その上でそれを乗り越える技法の可能性が彼らの言語的実践の中に見て取れることを示した。さらに、その成果はマイノリティ論、社会集団論一般に対しても二つの点で重要な意義を持つ。第一に、社会集団とその「外部」の関係性について、差別論的構図に巻き込まれず、社会集団がその「外部」を活用し、自らの集合性を存立させるメカニズムを記述することの意味を指摘した点。第二に、ある社会集団が集団固有の文化的特徴を希薄化させることで安定的に存立する事態を描出していく可能性を提起している点である。

以上のような内容を持つ本論文には、次のような長所が認められる。

第一に、現代日本のゲイ男性の直面する「ついていけなさ」を、特権的な他者とのつながりと総体的なつながりとの矛盾として定式化した点である。まず、「ついていけなさ」という

差別論では切り取れない問題を抽出し、さらに、それを多様な文献資料やインタビューを使って、ゲイ男性における二種類のつながりの歴史的な展開に結び付けることで、問題の位相を整理し、「圧力」や「息苦しさ」がどこに起因するかを解明した。これは本研究を、同性愛をめぐる社会学のなかで位置づけたときに、特筆してよい顕著な貢献である。

第二に、この矛盾を、ルーマンを介してより一般的な理論枠組みのなかで位置づけ、緻密な議論を展開している点である。異性愛の世界であれば、婚姻や家族という解によって局限化されている事態について、同性愛の場合にどのような独自の問題が生まれるかという形で整理することで、単なる実態の記述にとどまらない深い考察を可能にしている。そのことが（異性愛の）家族や恋愛などでの親密性のあり方を裏側から照射する視座を提供することにもつながっている。

第三に、上記二点と関連して、「ついていけなさ」の隘路を回避するゲイ男性の技法を示すことで、さまざまな社会問題への応用可能性を開いている点である。「ついていけなさ」という視角自体が差別論や当事者論の盲点を突くものであり、さらにある社会集団がその集団固有の文化的特徴を希薄化させることで逆に安定的に存立しようという指摘などからも、本論文での考察が幅広い分野へ貢献できることを示すと考えられる。

もちろん、本論文にも問題点がないわけではない。第一に、さまざまな文献資料や発言をめぐる執筆者の解釈には、それが一義的に正しいといえる根拠が十分に提示されたとはいいがたいケースがいくつかある。あつかう対象の性格上、当事者の語る言葉は断片的で曖昧なものにならざるをえないが、それだけにより注意深い読み解きが望まれる。第二に、クィア・スタディーズについて論文中でしばしば言及しているにもかかわらず、その位置づけが必ずしも明確に述べられていない。その結果、クィア・スタディーズによる研究の蓄積とどのような関係にあるのかが見えづらくなっている。第三に、ゲイ男性以外の親密性や集団形成を視野に入れていく際には、用いる概念を整備することで、もっと明瞭な議論が展開できるのではないかとの指摘があった。

しかしこれらの問題点は本論文の価値を損なうものではない。各種の文献に当たりつつ、多くのインタビューをこなし、日本の男性同性愛の「現在」を記述するとともに、そのつながりが抱える矛盾と可能性を、独自の理論的考察をふまえて指摘した点は、審査委員一同一致して、高く評価するところである。今後、細部を詰めて部分的な改良を加えることで、本論文は、同性愛をめぐる社会学だけでなく、家族や少数派集団研究などの分野でも広く参照される文献となると期待される。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。